

母が難聴になって学んだこと

中 二

ちようど一年前、僕の母は「難聴」になってしまった。病気一つしたことのない母が、その日、朝起きたら苦しんでいた。それでも、僕や妹たちに心配をかけまいといつも通りに笑って、

「いってらっしゃい。」

と見送ってくれた。ところが、その日の午後、家に帰ってきて僕は驚いた。いつも、

「おかえり。」

と笑って出迎えてくれる母の姿がないのだ。家の中に入っていくと妹たちが不安そうに母を見ていた。笑って、

「いってらっしゃい。」

と言ってくれた母が、ぐったりとしていたのだ。父に聞いてみると、僕たちが学校に行った後、耳の痛みで動けなくなってしまう、すぐに病院に行ったそうだ。耳の中を見ることができないくらいに腫れあがっていたが、結局、飲み薬だけをもらい帰ってきたというのだ。母は、耳の炎症によ

る激しい痛みと高熱で苦しんでいたのだ。それでも、

「ごめんね。」

と僕たちを気遣う母。それから二日間、母は高熱に苦しんだ。

三日目の朝、母はいつものように台所にいた。

「おはよう。」

と声をかけたが反応がない。おかしいと思い、もう一度声をかけたがやはり反応がなかった。近づいて母に話しかけると、母は冷静に、

「左耳が変なの。」

と言ってきた。熱は下がったのに、炎症がひどかったことで母は「難聴」になってしまったのだ。

それからまた母の辛い日々が始まった。左耳がほぼ聞こえなくなってしまうのだ。そのせいで、左右のバランス感覚がおかしくなり「めまい」を起すようになってしまうのだ。起きていても目がくるくる回っているし、横になっても回っていて気持ちが悪いと言うのだ。

一ヶ月ほどしたある日、母は、

「もう大丈夫。この耳と仲よく付き合っていかなくちやね。」

と言って、難聴になる前の生活に戻った。そばで見ているも辛そうなのが分かるくらいなのに、何でもないかのように笑って過ごしていた。大きな声や音は頭に響き、低音は聞き取りづらく、気分で調子が左右されてしまうそうだ。そんな中で母は言った。

「私の耳は天気予報より当たるね。」

僕はこの言葉を聞いて驚いてしまった。強くてすごい母と分かっていたが、こんなにも強いとは……。僕だったらこんな言葉は絶対に言えないと思った。

もうすぐ母が難聴になって、一年がたとうとしている。今でも僕たち子供の呼びかけに気付かないこともあるし、天気が悪いと辛そうなのもある。そんな母に僕は何ができるのか考えてみた。今までは当たり前にしてきたことが当たり前ではないことに気が付いた。つい楽をして、離れたところから母に声をかけていたが、近くへ行つて母の顔をしっかりと見て話すこと、左側からではなく右側から声をかけることなど僕たちにもできることがあった。

生きていけば、いつ何が起こるか分からない。それが今回のように家族なのか、自分自身なのか……。

そんなとき、自分に何ができるのか、どんな勇気が出せるのか、誰に対してもできるのか。僕は何かできる人になりたいと思った。